

### 2014年スケジュール

2014年6月12、13日

#### 全国油症治療研究会議

博多サンヒルズホテル〔福岡県福岡市〕に於いて開かれました。

#### 全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

### 昨年の研究成果

2014年6月12、13日に全国油症研究会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

### 平成26年度全国油症治療研究会議より 〔その1〕

毎年油症検診結果の集計を行っています。受診者の健康管理のため、また毎年の集計結果の積み重ねにより判明する症状の傾向や変化を治療研究に活かすために行っています。

福岡県保健環境研究所管理部企画情報管理課の小野塚大介先生と櫻井利彦先生は、油症検診の実施状況について報告されました。

#### <報告内容>

平成25年度に全国の各追跡調査班で実施された油症検診では、受診者の総数は739名、うち男性が350名(47.4%)、女性が389名(52.6%)でした。また、平均年齢は62.8±14.7歳、うち男性が63.1±14.8歳、女性が62.6±14.6歳でした。739名のうち、認定患者は574名(77.7%)、未認定者は165名(22.3%)でした。また、認定患者の症状について、

最も割合が高かったのは全身倦怠感(76.9%)であり、次いで、手足のしびれ(66.0%)、頭重・頭痛(61.1%)、咳嗽(51.0%)の順でした。

福岡県保健環境研究所保健科学部生活化学課の梶原淳睦先生は、平成25年度油症患者さんの血液中PCDFなどの測定結果と血液中残留化学物質の分析について報告されました。

#### <報告内容>

平成25年度の全国油症検診で血液中PCDF等を測定された方は、油症認定者が212名、未認定者が165名で合計377名でした。また、過去にPCDF等の濃度を測定されたことがない、長崎、福岡の認定者7名の血液中PCDF等濃度も測定しました。未認定者でPCDF等測定された方は前年に比べ80名減少しましたが、認定者でPCDF等測定された方は増加したため、検査数は前年とほぼ同じ384件でした。

測定結果は、認定者の血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度の平均は67 pg/g lipid、未認定者は27 pg/g lipidでした。今年度の未認定者のうち2名は、2,3,4,7,8-PeCDF濃度が50 pg/g lipid以上でした。

福岡女子大学国際文理学部の吉村健清先生は、認定患者追跡調査の課題と今後について報告されました。

#### <報告内容>

油症事件発生以来、油症認定患者さんの死因が一般住民と比べてどのように違うか、特にがん死亡リスクの上昇がみられるかどうかについて検討してきました。2007年までの追跡調査の結果はAmerican Journal of Epidemiology (Onozuka et. al.) 169: 86-95, 2009に報告しています。現在も追跡調査を継続し、2013年までの状況については研究班など関係者の協力により概要が得られましたが、個人情報保護法の強化により油症認定患者さんの系統的な住民票取得は困難な状況です。そこで、患者さんの協力を得ながら、この調査を継続するための方法を現在協議しているところです。

裏面もお読みください。→

### 平成26年度 自治体連絡先

**福岡県班** (福岡県、大分県、宮崎県)  
福岡県保健医療介護部保健衛生課食品衛生係  
TEL: 092-643-3280

**長崎県班** (長崎県、佐賀県、熊本県)  
長崎県県民生活部生活衛生課食品乳肉衛生班  
TEL: 095-895-2364

**関東以北班** (東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県)  
栃木県保健福祉部生活衛生課食品安全推進班  
TEL: 028-623-3109

**千葉県班** (千葉県)  
千葉県健康福祉部衛生指導課企画調整班  
TEL: 043-223-2638

**愛知県班** (岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)  
愛知県健康福祉部保健医療局生活衛生課食の安全・安心グループ  
TEL: 052-954-6297

**大阪府班** (滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)  
大阪府健康医療部食の安全推進課安全推進グループ  
TEL: 06-6944-6703

**島根県班** (島根県、鳥取県)  
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生グループ  
TEL: 0852-22-5264

**広島県班** (広島県、岡山県)  
広島県健康福祉局食品生活衛生課  
TEL: 082-513-3104

**山口県班** (山口県)  
山口県環境生活部生活衛生課 食の安心・安全推進班  
TEL: 083-933-2974

**高知県班** (愛媛県、高知県、香川県)  
高知県健康政策部健康対策課  
TEL: 088-823-9678

**鹿児島県班** (鹿児島県、沖縄県)  
鹿児島県保健福祉部生活衛生課 食品衛生係  
TEL: 099-286-2786

**平成23・24年度に行った遺伝子検査結果と、健康への影響に関する分析を行っています。**

奈良県立医科大学健康政策医学講座の松本伸哉先生は、カネミ油症患者のダイオキシン類の体内負荷量変化率とAhRのSNPの関係について報告されました。

**<報告内容>**

油症患者さん220名（男性：118名、女性：102名）のAhR遺伝子多型の調査結果と、油症検診で測定したダイオキシン類の濃度をもとに、AhR遺伝子多型とダイオキシン類の半減期の関係を分析しました。今回分析したのはAhRプロモーター領域の多型で、TTの場合にCYP1A1の発現が高まるとされています。摂取による影響を少なくするため、2,3,4,7,8-PeCDFの血中脂質あたり濃度が50 pg/gの患者さんを対象にしました。

その結果、CT型の患者さんはCC型の患者さんよりダイオキシン類の半減期は長期でした。AhR遺伝子型ごとの人数は、CC型が43名、CT型が39名、TT型が11名でした。TT型の女性は少なく、CC型・CT型と年齢分布は異なっていました。TT型の患者さんは少なく、年齢分布も異なっており、半減期との関係は明らかになりませんでした。

奈良県立医科大学健康政策医学講座の赤羽学先生は、AhRのSNPと症状の関係の追加分析について報告されました。

**<報告内容>**

油症患者さん220名（男性：118名、女性：102名）の調査結果をもとに、AhR遺伝子多型と2008年厚労省調査における皮膚症状、心筋梗塞、高血圧などの症状の有無との関係を分析しました。今回分析したのはAhRプロモーター領域の多型で、TTの場合にはCYP1A1の発現が高まるとされています。その結果、遺伝子型は、CC型が97名、CT型が91名、TT型が30名、2名が不明でした。TT型の女性は高齢者で少なく、CC型・CT型と年齢分布が異なったため、今回はCC型とCT型を中心に分析を試みました。いずれの症状も症状のある患者さんが少なく、明らかな傾向は見られませんでした。動脈硬化と心筋梗塞は、CC型に多い傾向がありました。男性のみCC型、CT型、TT型の3群で分析すると、関節痛が遺伝子多型と関連があり、CT型、TT型では高齢の方に多く、CC型は比較的若い方に多い傾向がありました。

福岡市立こども病院の月森清巳先生は、油症患者さんにおけるAhR遺伝子多型と児への健康影響（流産、胎児死亡、性別）との関連について報告されました。

**<報告内容>**

ダイオキシン類は、細胞内受容体であるダイオキシン類受容体（AhR）と結合して毒性を発揮すると考えられています。最近、AhRには遺伝子多型が存在し、TT型はCC型に比べて薬物代謝酵素の発現を亢進させることが明らかとなり、AhR遺伝子多型によりダイオキシン類に対する感受性が異なる可能性が指摘されています。そこで、油症患者

さんにおけるAhR遺伝子多型と児への健康影響（流産、胎児死亡、性別）との関連について検討しました。

油症発生後に妊娠した油症患者さん59名（計142妊娠）のAhR遺伝子多型の頻度は、CC型が53妊娠（37.3%）、CT型が71妊娠（50.0%）、TT型が18妊娠（12.7%）で、一般健康人における各遺伝子型頻度と差はありませんでした。児への健康影響（人工流産、自然流産、胎児死亡、男児出生）の有無とAhR遺伝子多型（CC型、CT型、TT型の各遺伝子型の頻度）との関連について検討しましたが、いずれの健康影響においても明らかな傾向はみられませんでした。

**油症検診の集計結果等から得られた油症患者さんの症状と、血中ダイオキシン類濃度との関連を調べています。油症患者さん特有の症状を見出し、治療研究に活かすために行っています。**

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科眼科・視覚科学教室の上松聖典先生は、油症におけるマイボーム腺の欠損の評価について報告されました。

**<報告内容>**

油症事件が発生して40年以上経ち、油症患者さんに、目の症状である瞼板腺チーズ様分泌物はほとんど見られなくなりました。しかし最近になっても患者さんの眼脂過多（めやに）の症状は多くみられます。血液中ダイオキシン類濃度が高いと、まぶたから脂肪を分泌する「マイボーム腺」が障害され、欠損してしまう可能性が考えられます。そこで、油症検診を受診された方のマイボーム腺欠損の程度を検査し、年齢やダイオキシン類濃度と関連がないか検討しました。その結果、一般の方と同じように、年齢が高い程マイボーム腺が欠損していましたが、血液中ダイオキシン類の濃度とマイボーム腺の欠損の間に関連は見られませんでした。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの三苦千景先生は、油症検診受診者における皮膚症状の検討について報告されました。

**<報告内容>**

油症発生から40年以上経ち、皮膚症状がない認定患者さんが増えていますが、今なお、油症の特徴的な皮膚症状に悩んでいる患者さんもいらっしゃいます。そこで、2012年度全国一斉検診を受診された認定者352名（男性185名、女性167名）の皮膚症状と血液中ダイオキシン類濃度との関連を調べました。その結果、問診で最近の化膿傾向ありと答えた患者さんの血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度は、最近の化膿傾向がないと答えた患者さんより高濃度でした。また、黒色面皰の重症度と分布の程度がひどい方は、血液中2,3,4,7,8-PeCDF濃度が高い傾向がありました。

昨年の研究成果の概要は、油症ニュース25号に続きます。